VIEW21

ビュー21 高校版

臨時増刊号

2017 EXTRA EDITION

http://berd.benesse.jp

未知の「海外体験」から、主体性を育む

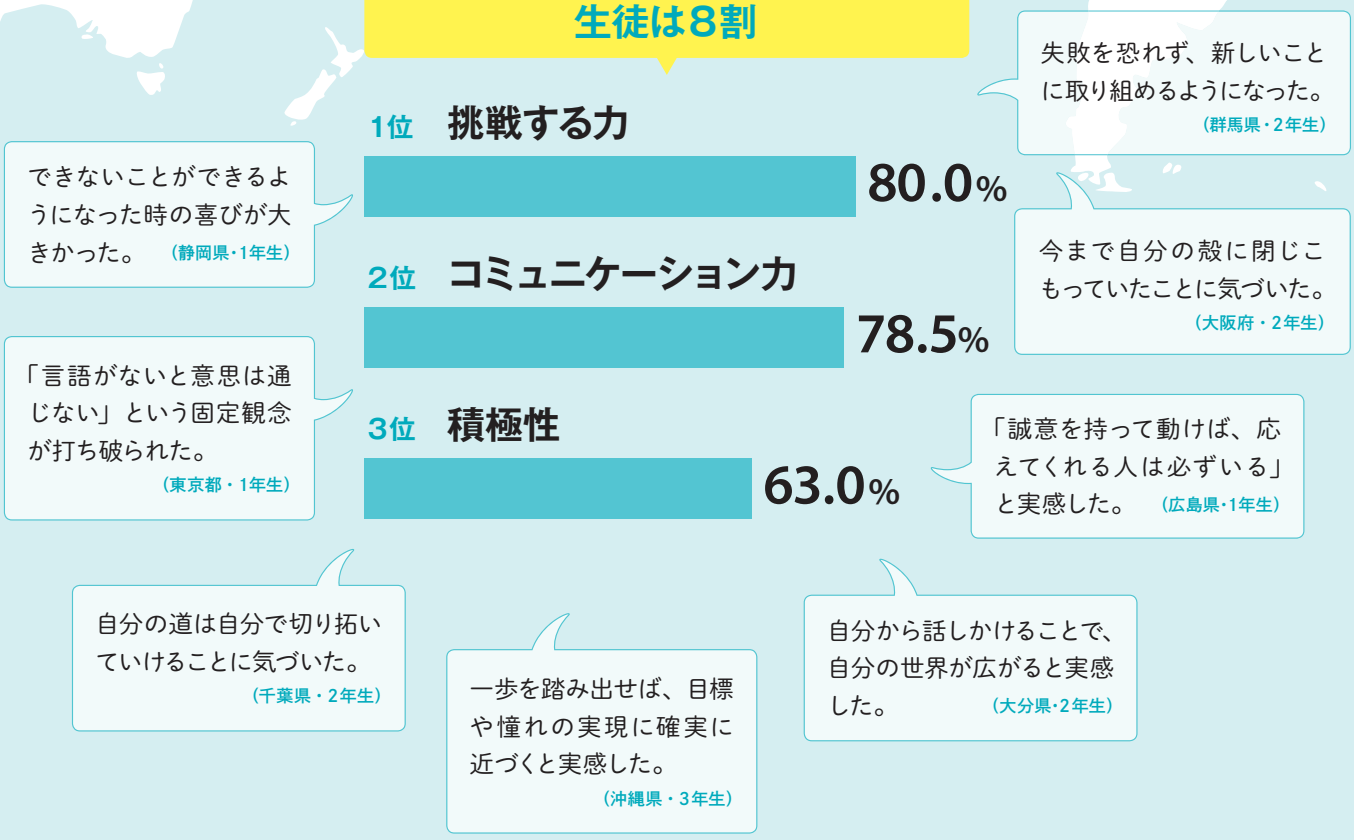
「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」留学生インタビュー

ベネッセ教育総合研究所

目標を見据え、行動に移す原動力
体験で、高校生は飛躍的に成長する

社会が大きく変化する中、留学経験は社会で一層求められるようになっている。
体験を通して得られる成長とその価値を、留学生の声を交えて見ていく。

図1 留学で身についた力として、「挑戦する力」を挙げた生徒は8割



＊図1・2は、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」2期生への調査結果から抜粋。生徒の学年は2016年度留学当時

世界に目を向けなければ、生きていけない時代

上で紹介している**図1・2**は、「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」の2期生（2016年度留学生）への調査結果の一部だ。2～3週間の滞在が大半だが、短期留学であっても、高校生が自分の可能性や目指すべき方向性に気づき、主体的に動き出そうとしていることがうかがえる。

10代後半という、豊かな感受性を持つ時期にある高校生は、慣れ親しんだ日本を離れ、未知の環境に身を置くことで、大人の何倍もの強い刺激を受ける。当たり前だと思っていたことが通用せず、価値観が相対化されたり、多様な人々との交流を通して、視野や興味・関心の幅が広がったりする経験は、大きな進路選択を控える高校生にとって、自分と向き合い、自分は何がしたいのか、自分には何ができるのかを深く、そして具体的に考えるきっかけとなるはずだ。

現代は、「Volatility（変動性）」「Uncertainty（不確実性）」「Complexity（複雑性）」「Ambiguity（曖昧性）」の頭文字から、「VUCA（ブーカ）」の時代

CONTENTS

学校現場×トビタテ！ 留学JAPANディレクター対談 P.03

大きな成長につながる海外体験。学校こそが生徒の後押しを

東京都・私立品川女子学院理事長・中等部校長
漆（うるし） 紫穂子（しほこ）先生

文部科学省 トビタテ！留学JAPAN プロジェクトディレクター
船橋（ふなばし） 力（ちから）氏

2期生インタビュー P.07

未来につながる！高校時代の留学体験

筑波大学社会・国際学群1年（広島県立三次（みよし）高校卒業）
原田賢志（たかゆき）さん〈アメリカ・フィリピンに留学〉…… P.07

長崎大学多文化社会学部1年（北海道・私立札幌日本大学高校卒業）
高澤瑞歩（みずほ）さん〈アイルランドに留学〉…… P.09

兵庫県・神戸市立葺合（ふきあい）高校3年
吉井佳弥（かや）さん〈イタリアに留学〉…… P.11

佐賀県立致遠館高校3年
志岐友晶（しきともあき）さん〈フィリピンに留学〉…… P.13

「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」

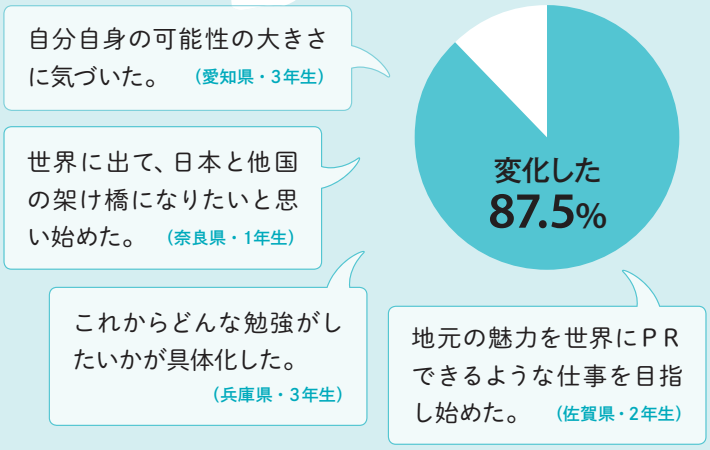
「世界を視野に入れて貢献したい」という意欲ある高校生を支援し、海外留学の気運を高めることを目的としている。高校生自身が留学内容、渡航先、期間（14日～1年間）を自由に設計でき、留学エージェント等のプログラムを利用することも可能だ。また、奨学金は返済不要の給付となる。

2018年度・4期生の募集概要はP.6に掲載

将来の 2～3週間の海外

グローバル化に伴って
高校時代の海外

図2 **留学によって、将来への考え方が変化した生徒は約9割**



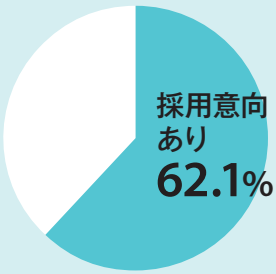


図3 **「留学経験者を採用したい」と回答した企業は6割以上**

＊図3は、「文部科学統計要覧（平成27年版）」を基に編集部で作成

と呼ばれ、今後どのように変化していくのか、誰もが予測不能な状況にある。そうした時代を生き抜いていくために必要な力は、一朝一夕には身につけられない。しかし、留学という、自ら「コンフォートゾーン（＊1）」を脱する経験に挑戦することで、短期間でも、日本にいるだけでは実現できないような、大きな成長や変化を遂げることができる。そして、そこから得た自信を原動力として、帰国後のさらなる成長にもつなげていくことができる。

また、グローバル化の進展に伴い、文化的な背景の異なる人々と協働する必要性は、今後一層高まっていく。たとえ自国の中にいても、世界の人々とつながらずに生きていくことはできなくなるだろう。実際、留学経験のある人材を求める日本企業は年々増加傾向にあり、15年度には6割を超えている（図3）。若いうちに、価値観の違いに戸惑ったり、思うようにコミュニケーションが取れなかったりといった困難に直面し、それらを乗り越えた経験が、評価されているためと言えるだろう。将来、長期留学に挑戦する準備としても、まず高校時代に世界を見ておくことの意義は限りなく大きい。

＊1 今の自分にとって心地よい環境。

学校からの情報提供が生徒の意欲を高める鍵！

大きな成長につながる海外体験。学校こそが生徒の後押しを

生徒に大きな影響を与え、その後の成長に結びついている留学。生徒は、実際にどのような変化を見せるのだろうか。
また、教師は、留学にあたっての生徒の不安や悩みにどう対応し、支援しているのだろうか。
様々な形で留学を支援する東京都・私立品川女子学院の漆紫穂子（うるししほこ）理事長と、
「トビタテ！留学 JAPAN」の船橋力（ちから）プロジェクトディレクターが語り合った。

海外体験で得られる6つの経験

1 外から日本を見る
2 知らないことを知り、知りたいことを知る
3 違う価値観に触れ、意味を知る
4 己のことや日本を知る、知りたいと思う
5 飛び込むことに自信を持つ
6 逃げないで苦労する

異文化や外国語に触れること以外にもできる多様な経験は、どの生徒にも必要！

経験から得られるもの

・視野の広がり　・世界への関心
・多様性受容　・アイデンティティーの確立
・自己肯定感　・ストレス耐性

これらはどの生徒にも身につけてほしい！

感受性が豊かで、新しいことにも果敢に挑戦し、吸収していく10代での海外体験は、その後の人生への影響力も大きい

生徒が海外に目を向けるきっかけを与えるとともに、
海外に関心のある生徒が「留学したい」と言えるようにするためには、
学校の後押しが重要！

＊「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」資料を基に編集部で作成

留学の意義

日本と異なる環境に身を置くことで、自分を客観視できる

――漆理事長と船橋プロジェクトディレクターは、留学を経験した高校生とたくさんお話しされていると思いますが、留学することの意義をどのようにお考えですか。

漆　留学の意義は、まず、自分自身を客観的に見つめる機会になることではないでしょうか。例えば、本校では修学旅行でニュージーランドを訪れますが、多くの生徒がそれを機に、自分自身や日本について深く考えるようになります。同国は、女性の社会進出が日本より進んでいたり、先住民族や欧州系などの多様な民族から成る多民族国家であったりと、日本の社会とは異なります。短期間の滞在でも、日本ではあまり触れることのない価値観に直面し、アイデンティティーが揺さぶられるのでしょう。

船橋　それと同時に、自己の内面を見つめる機会にもなります。「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース（以下、トビタテ！）」の留学生に話を聞くと、最初は文化の違いによる衝突や自分

の英語が通じないといった経験をして、くじけそうになる。けれども、自分で行くと決めた、強い意志を持って臨んだ留学なので、自分はなぜ今ここにいるのか、今の自分にできることは何かを改めて考え、つまずきを乗り越えられたと言います。

漆　留学を機に内面を見つめて将来の目標を見いだすと、それまで試験のためだった勉強が将来の目標を達成するための学習になり、より意欲的に取り組むようになります。留学の意義には、そうした学習意欲へのよい影響も挙げられます。

船橋　「トビタテ！」のアンケートでは、留学にあたっての悩みに「受験勉強が遅れること」を挙げた生徒が2割ほどいますが（**P.5図1**）、帰国後には大半の生徒が「受験勉強の遅れは取り戻せる」と言い、実際、志望校に合格しているようです。

漆　学力は、時間をかけた分だけ伸びるというものではなく、学習の質が重要です。語学力で言えば、「英語が話せなくて悔しい」という経験をした生徒は、帰国後、英語学習に力が入り、成績を伸ばしていきます。「これはこう伝えたい時に使える」など、英語を使う場面が具体的に思い描けるようになり、定着しやすくなるからでしょう。また、帰国後も留学先でできた友人とSNSで連絡を取り合いますから、英語の読み書きはそこでも実践的に学べます。短期留学だけでは語学力の伸びはそれほど期待できませんが、帰国後の学習への影響はとても大きいですね。

船橋　留学先の学習が日本の学校よりもハードで、それを逃げずにやり切ったことで自信がついたという話も、留学生からよく聞きます。

漆　慣れない英語のテキストで予習・復習をして、英語でレポートを書くことは相当な負荷で、生徒は限られた時間で課題を終わらせるための方略を考えるようになります。帰国後もそうした経験を生かして学習に向かうことで、学習の質が高まり、学力も伸びていくと感じています。

船橋　海外に行くことで、違う価値観に触れる、自分を見つめる、新しいことに挑戦する、逃げずにやり切るなど、多様な経験ができます。それらの経験は、生徒に深い思考をもたらし、視野の広がりや多様性の受容、ストレス耐性など多くのものを得ることにつながります。留学は、生徒にとって、最良の主体的・対話的で深い学びの場の1つになると思います。

東京都・私立品川女子学院
理事長・中等部校長
漆 紫穂子 うるし・しほこ

他校の国語科教師を経て、1989年、同校に着任。2006年から中・高等部の校長を務めた後、17年4月から現職。15年度、文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援及び大学の世界展開力強化事業合同プログラム委員会」委員。

文部科学省　トビタテ！留学JAPAN
プロジェクトディレクター
船橋 力 ふなばし・ちから

大手商社でODAプロジェクトを手がけた後、企業と学校向けの体験型・参加型の教育プログラムを提供する会社を起業。その経験を生かし、「トビタテ!留学JAPAN」の創設に尽力。世界経済フォーラムの「ヤンググローバルリーダー2009」のメンバーに選出。

高校時代に留学する価値

怖いもの知らずの若い時こそ果敢に挑戦し、吸収できる

――それでは、「高校時代に」留学した方がよい理由は何でしょう。

漆　生徒を見ていると、若ければ若いほど間違いや失敗を恐れずコミュニケーションを取ろうとする意欲が強く、新しいことにも果敢に挑戦してどんどん吸収していきます。そして、様々な経験をする中で興味の幅が広がったり、内面を見つめることで思いが整理されて自分の進みたい道が見えてきたりと、進路選択にも大きな影響があると感じています。

船橋　高校時代に短期でも海外体験があると、大学でも留学する人が多いという話をよく聞きます。私は「トビタテ！」の説明会で、「20代まで

図1　留学にあたり、迷ったり悩んだりしたこと（複数回答）

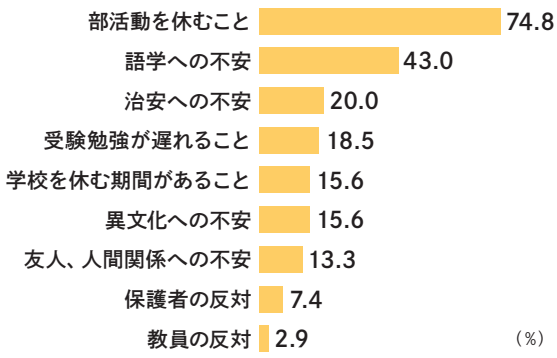


図2　応募したきっかけ

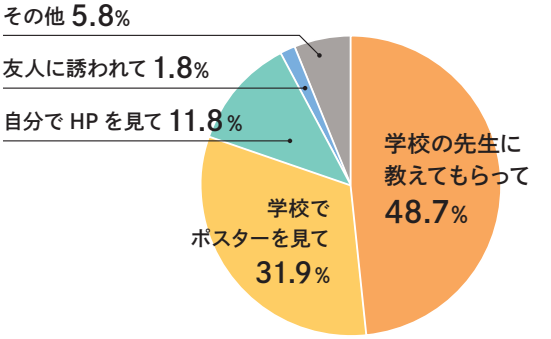


図1・2は、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」2期生への調査結果より抜粋（2016年度）

の間に3回留学しよう」と呼びかけています。1回目は高校生の多感な時期に広い世界を知り、2回目は大学時代に語学や専門分野を学び、3回目は社会人として仕事に生かすための専門性を深めていく。そうしたホップ・ステップ・ジャンプが大きな成長につながりますし、そのホップが大学時代では遅いのです。

社会からも求められる留学

企業も大学も留学経験を求めている

――留学経験は社会的ニーズも大きいと思います。

漆　例えば、手術用ロボットが開発され、インターネットで遠隔操作ができるようになったら、患者は世界中のどの医師の手術でも受けられるようになるという話を、医師から聞きました。それは、グローバル社会というよりもボーダーレス社会であり、日本にいても世界と伍していかなければならなくなるということでしょう。そこで必要となる資質・能力を育むために、留学はますます重要になると考えています。

船橋　企業は社会の動きに反応し、採用時に留学経験を重視するようになっています。「留学経験者を採用したい」という企業は約6割（P.2図3）、「留学のために留年や休学をしても、採用でマイナス評価にはならない」という企業は約7割、「留学経験が仕事で役立つ」という企業は約8割ありますから（＊1）、留学経験は企業からも求められているのです。また、大学新卒採用時に、高校時代の経験を見る企業も少なくありません。高校時代はアイデンティティーが形成される時期であり、そうした時に苦難を乗り越えた経験をしていれば、強い精神力につながると捉えられます。その苦難の1つが留学というわけです。

漆　大学入試改革においては、多面的・総合的評価が進められ、留学も評価の対象に挙げられています。留学経験は、進学・就職の双方にプラスの材料になると言えそうです。

留学で自分自身を見つめ直し、目的意識が高まることで、学習の質も高まっていきます

漆　紫穂子

高校生の留学を増やすために

思い込みをせず、生徒にしっかりと情報を伝える

――ただ、留学する高校生はまだまだ少ないのが現状です。

船橋　高校生の留学に対する障壁の1つになっているのが、情報不足だと思います。例えば、留学しない理由に「経済的な厳しさ」がよく挙げられますが、「トビタテ！」では2～3週間の短期留学でも費用を給付していますし、「ふるさと納税」を活用して資金を集め、高校生の留学支援制度を整えている自治体もあります。また、「部活動を休むこと」は、生徒が留学をためらう要因の1位（図1）となっていますが、「トビタテ！」の「スポーツ・芸術コース」では、サッカー部の生徒がブラジルでサッカーを習ったり、吹奏楽部の生徒がアメリカでサックスを習ったりしています。自分の技能が上達することで、部全体のレベルアップに貢献する例もあります。そうした情報を知らないために、留学に関心があっても「行きたい」と言い出せない生徒もいると思うのです。

＊1　トビタテ！留学 JAPAN「就活と留学に関する調査」（2017年6月）

漆　本校では、「トビタテ！」が始まった年から、中学3年生の学年集会で留学に関する情報を伝えています。また、留学を経験した生徒が、留学に向けた準備から帰国後のことまで、体験談として後輩に伝える場を設けています。

船橋　「トビタテ！」のアンケート結果を見ると、応募のきっかけとして「学校の先生に教えてもらって」と「学校でポスターを見て」で約8割を占めます（**図2**）。先生からの働きかけが留学の第一歩となるのです。特に、地方では、周りに留学経験者が少ないと思いますので、学校からの情報提供がより重要になるでしょう。実際、「トビタテ！」では地方からの応募者が少なく、生徒や教師の意識があまり海外に向いていないのだと感じています。

漆　都市部の生徒の方がグローバル化を実感し、留学情報に触れる機会が多いからかもしれません。

船橋　私は、地方で幼少期から同じ人間関係の中で育っているような高校生にこそ、環境変化による刺激が必要であり、それには留学が最適だと思うのです。

――留学促進に向けて、まず教師ができることは何だと思われますか。

漆　本校では、生徒が海外に目を向けるきっかけとなるよう、海外の高校生を留学生として受け入れたり、地域に住む外国人を招いて話をしてもらったりして、外国人と交流する機会を設けています。もし外国人を招くのが難しければ、海外経験のある大人に話をしてもらうだけでも、生徒の視野は広がると思います。

船橋　海外に関心を持つ生徒は、どの学校にも必ずいると思います。自校の生徒には関係ないと決めつけてしまうのではなく、生徒に成長の一機会としての留学のよさを伝え、留学したいという生徒の後押しをしていただきたいと思います。

地方の高校生こそ留学し、
大きな刺激を受けて、
成長への糧を手にしてほしい

船橋　力

トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース　4期生募集概要

◎**募集期間／2017年10月2日～2018年2月1日17時必着**
＊アカデミック（テイクオフ）分野については、2018年4月に高校に入学する新高校1年生を対象とした募集を別途実施。応募の締め切りは、2018年4月26日17時必着。

◎**審査の流れ／応募申請→書面審査（1次審査）→面接審査（2次審査）→採否決定**

◎**主な支援内容／留学先、留学期間に応じた定額を支給（支給額例は下図参照）**

◎**2017年度（3期生）の選考結果**　申請1,904人（839校）→採用501人（330校）

▼**詳細は下記URLからご覧ください。募集説明動画もご覧いただけます。**
http://www.tobitate.mext.go.jp/hs/

高校生コース4期生の募集チラシ、ポスターは、無料で御請求いただけます。
トビタテ　広報ツール　で　検索

分野		留学期間	活動内容	募集人数	支給額例*3
アカデミック	テイクオフ	2～3週間	海外の語学学校等において外国語の習得を主たる目的とするプログラムに参加するとともに、留学先で外国語を用いて異文化交流を行う。	150人*2	36万円
	ショート	2週間～3か月間	海外の高等学校や大学等の教育機関に在籍し、外国語を用いて様々な科目を学修したり、教育プログラムに参加したりする。	90人	45万円
	ロング	4か月間～1年間	海外の高等学校等に長期間在籍し、外国語を用いて様々な科目を学修する。	20人	50万円＋月額14万円
プロフェッショナル		2週間～3か月間	現在学んでいる専門知識・スキル等を生かして、あるいは将来的に携わりたいと考える領域について、実地研修やインターンシップ等を通じて専門知識やスキルの習得を目指す。**[未来テクノロジー人材枠]** 数理情報科目やITの素養を持ち、将来的に携わりたいと考えるテクノロジー領域（プログラミング、制御技術、ロボティクス、Webサービス・デザイン、モバイルアプリ開発等）に関する学修やインターンシップ等の実践活動を行う。	80人（うち50人は未来テクノロジー人材枠）	45万円
スポーツ・芸術		2週間～3か月間	学内の部活動または学外の活動等を生かして、海外のトレーニングセンター、教育機関、芸術学校等に在籍し、現地指導者の下で技量の向上を目指したり、現地でのレッスン・トレーニングを伴って大会等に参加したりする。	80人	45万円
国際ボランティア		2週間～3か月間	海外でのボランティア活動に参加し、体験を通じて国際協力についての理解を深める。	80人	45万円

＊2　テイクオフの募集人数は新高校2～3年生向け100人、新高校1年生向け50人となる。2018年4月に高校等に入学する生徒等（新高校1年生）については、募集期間・選考方法が異なる。　＊3　日本学生支援機構の第二種奨学金に掲げる家計基準を満たす生徒が、北米・欧州・中近東（一部の国を除く）に留学した場合の支給額（アカデミック〈ショート〉、プロフェッショナル、スポーツ・芸術、国際ボランティアの留学期間は、14日以上29日以下とする）。

3年生でアメリカ・フィリピンに留学　アカデミック分野（ショート）

他国の留学生とともに各地域の課題を語り合った経験が、夢の実現への意欲に

筑波大学
社会・国際学群1年
（広島県立三次（みよし）高校卒業）
原田賢志（たかゆき）さん

原田さんの留学

目的◎より多様な価値観に触れて視野を広げ、本当にやりたいことを見定められるよう、他国の人々と交流したいと考えた。

印象に残ったこと◎他国の高校生と世界各地の地域課題について話し合い、彼らの解決策を具体化する行動力や、積極的に発言する姿勢に刺激を受けた。

留学による変化◎「地域に貢献したい」という思いが強くなり、その実現に必要な学問を総合的に学べる大学・学群に進学。世界各地の地域開発に携わる国際公務員を目指し、将来の目標の実現につながる授業を主体的に選んで履修している。

留学の目的

異文化交流の中で、自分のやりたいことを見定めたい

私は、都市部への人口流出などにより、次第に活気を失っていく地域の様子を見て育ちました。そのため、過疎化などの地域課題に関心があり、高校時代は広島県教育委員会の事業「広島創生イノベーションスクール」（以下、同スクール）に参加して、県内各地の高校生と一緒に地域課題を調べていました。その話し合いの中で、課題への意識や捉え方が一人ひとり異なることに興味を持ち、より多様な価値観に触れたいと考え始めました。そうして視野を広げ、さらには自分の本当にやりたいことを見定めたいという思いもあり、世界各国の高校生と交流する、同スクールの海外研修への参加を志し、留学の奨学金を得ることができる「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム 高校生コース」に応募しました。

留学の様子

地域の現状改善に向け、行動を起こす必要性を痛感

3週間の研修期間のうち、最初の1週間はアメリカのハワイ州に滞在

恩師・保護者が語る 原田さんの成長

将来の目標を明確にし、留学後の学習に力を注いだ

広島県立三次高校
中本真吾先生

原田さんは、以前から国際交流や世界の地域課題に関心があったようですが、留学からの帰国後は、世界各地の地域開発への支援を、将来の目標として明確に意識し始めました。世界に目を向けられるようになっただけではなく、自分自身の内面としっかり向き合えるようになったという点で、一層の成長を感じます。

高校時代という人生で最も多感な時期に、価値観が異なる人々と直接触れ合い、切磋琢磨する経験を持つことには、大きな価値があると思っています。そこで、原田さんには「後悔しないよう全力でやり切ってほしい」とアドバイスし、背中を押しました。また、3年生での留学だったので、「留学をしたから受験勉強が……」などと自分で言い訳をしないのはもちろん、周りからもそう言われないよう、ほかの生徒に負けないくらい勉強してほしいと伝えました。原田さんは私の期待以上に頑張り、希望進路を見事に実現しました。

これからの時代を生き抜いていく

し、アメリカ本土や東南アジア諸国から集まった生徒とともに、世界各地の地域課題について英語で話し合いました。例えば、ニュージーランドのある生徒は、先住民族の言語であるマオリ語の話者が減少していると語り、公教育でのマオリ語の学習を充実させて、後世に継承していくべきだと訴えていました。少数言語の衰退への危機感は私にはなかったので、目を開かれる思いでした。また、フィリピンのある生徒は、地元の河川の汚染対策として化学の研究に取り組み、水質の改善に成功したと話していました。私は、課題を認識するだけではなく、その解決に向けて行動する必要性を痛感し、自分には何ができるのか、何がしたいのかを具体的に考え始めました。

積極的に発言する他国の生徒の姿も、強く印象に残っています。英語力に自信がなかった私は、最初は聞き役に回ってばかりでしたが、自分の考えを相手に伝えようとする意欲にあふれた彼らの姿勢に刺激を受け、次第に堂々と自分の意見を主張できるようになりました。

残りの2週間はフィリピンに滞在し、語学学校で英語を学ぶとともに、現地の中高一貫校を訪れ、日本文化や故郷・広島の歴史などに関するプレゼンテーションを英語で行いました。広島に原爆が投下された事実を知らない生徒が多く、世界中の人に伝えていかなくてはと思いました。

フィリピンの中高一貫校の生徒に、折り鶴には平和への祈りが込められていることを伝え、一緒に鶴を折った。

留学を終えて

世界各地の開発支援に向け、国際公務員を目指す

受験生として忙しい高校3年生の夏に留学したため、帰国後は勉強に集中しました。留学を通して、以前から漠然と抱いていた「地域開発に貢献したい」という思いが明確になり、それが、勉強へのモチベーションを高める原動力になりました。

地域が衰退する背景には、労働環境の変化や行政支援の不足といった様々な要因が絡み合っているので、具体的な支援策を見いだすためには、分野を横断した知識が欠かせません。そこで、政治学や経済学、法学などを総合的に学べる筑波大学社会・国際学群に進学し、1年生の今は、基礎科目の中から、専門的に学びたい国際政治や国際法などに関連する授業を中心に履修しています。また、英語の授業は最上位クラスに所属しています。海外からの留学生や帰国子女を始め、私より英語が上手な学生も多いのですが、留学中に積極的に英語を用いた経験から、私は自分から進んでコミュニケーションを取れています。

今後は、在学中に改めて海外に留学し、卒業後には海外の大学院への進学を検討中です。将来的には、国際連合などに所属する国際公務員として、特定の国の利害にとらわれない立場から、世界各地の地域開発に携わりたいと考えています。

私の学ぶ目的や姿勢、将来への展望は、高校時代に他国の生徒の行動力や積極性から刺激を受けたからこそ、得られました。大学受験という岐路に立った時、留学した意義は極めて大きかったと、実感しています。

ためには、自分の生まれ育った地域に目を向けるだけでは不十分ですし、世界ばかりに注目しても、うまくいかないでしょう。常にローカルとグローバルの両方の視点を併せ持つことが重要だと考えています。

原田さんには、国際舞台で活躍できる人材としてキャリアを積んでいく上で、大変なことや困難も多いと思いますが、失敗を恐れず、世界のために羽ばたいていってほしいと思っています。

若い時期に異文化に触れ、心の成長につながった

原田さんの保護者
原田理恵さん

息子から留学を相談された際は、3年生の夏という大学受験を控えた時期だったため心配しましたが、本人の「受験勉強も頑張るから大丈夫だよ」という言葉を信じることにしました。学校の行事や課題などで忙しい中でも、とても生き生きと留学準備を進めていました。

息子は、漠然としていた将来の夢を、留学後には、地域開発の支援という具体的なものにしたようです。また、他国の文化の中で生活したことにより、考え方がより柔軟になったと感じます。何歳になっても学ぶことはできますが、感性が豊かな若い時期に異文化に触れたことで、心の成長につながり、社会貢献への意識が強くなったのだと思います。

3年生でアイルランドに留学　プロフェッショナル分野

海外での就業体験を通して、視野が広がり、積極性やチャレンジ精神が身についた

長崎大学
多文化社会学部1年
（北海道・私立
札幌日本大学高校卒業）
高澤瑞歩（みずほ）さん

高澤さんの留学

目的◎地元・札幌の観光プロモーションを手がける際のお手本として、海外の観光地の施設などでのインターンシップを通して観光業を学びたいと考えた。

印象に残ったこと◎観光客が利用しやすい施設やサービスを体感した。また、ヨーロッパの学生は多言語を習得したり勉強熱心だったりと、刺激を受けた。

留学による変化◎英語力の向上を実感する一方、欧米人の習得者が少ないアジアの言語を身につけることで、自分の強みにしたいと考えるようになった。また、新たなことに進んで挑戦するようになり、現在は地域と連携した学外のサークル活動に参加。

留学の目的

海外で観光業を学び、地元を観光PRしたい

私は、小学4年生で英会話教室に通い始めたのをきっかけに英語が好きになり、学校の短期交換留学制度などを利用してカナダやオーストラリアへ行きました。ところが、海外で地元・札幌の知名度があまり高くないと知り、世界の人に広く知ってもらいたいと思っていました。

そんな折、先生から「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」を紹介していただきました。地元の観光プロモーションを手がけるため、お手本となる地域で観光業を学びたいという思いから、受験を控えた3年生でしたが、留学することを決めました。

そして、英語圏の観光地の中から、北海道と似た状況のアイルランドの首都・ダブリンを留学先に選び、実践を通して学べるよう、インターンシップが可能な施設や企業を探して活動計画を立てました。

留学の様子

ダブリンの街を歩き、観光振興のヒントを探る

インターンシップ先として、当初

恩師・保護者が語る 高澤さんの成長

自分の意見を主張するなど積極的な姿勢が定着した

北海道・私立札幌日本大学中学校・高校
佐々木貴久先生

高澤さんは、事前準備も含め、留学を経験したことで、自ら積極的に行動する姿勢が身につきました。例えば、帰国後は受験勉強への集中力が増し、小論文や英作文の添削を受けるため自ら職員室に足繁く通い、納得の行くまで先生と議論していました。また、卒業後に小樽の観光に関するインターンシップを行いたいと、自分で観光業者に電話でアポイントを取り、小樽に出向いて、担当者とインターンの計画を立てていました。

高澤さんのほかにも、本校で「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」に参加した生徒の中には、突然の依頼だったにもかかわらず、学校説明会で大勢の来校者を前に堂々と留学体験を話してくれた生徒もいます。自分から一歩を踏み出す勇気や、何事にも進んで挑戦する姿勢など、人としての大きな成長を感じました。

日本にいれば、誰かが手を貸してくれたり、背中を押してくれたりと、周囲からの支えが得られますが、留

はダブリンの歴史博物館を予定していましたが、渡航直前になってNGとなり、急きょ、IT系の企業に受け入れてもらうことにしました。

ところが、同社の他のインターン生にはヨーロッパ各国からの大学生が多く、彼らと比べてパソコンスキルの乏しい私は、仕事をあまり与えてもらえず、初めは辛い思いをしました。それでも、自分にできることを精いっぱい手伝い、周囲と積極的にコミュニケーションを図るうちに、少しずつ任される仕事が増え、社員の方からも信頼してもらえるようになりました。「想定外の環境でも、忍耐強く努力することで、やりがいが見つかり、応援してくれる人が増える」と実感しました。

インターンシップでは観光業に携われませんでしたが、週末には町を歩き、観光振興に役立つヒントを探しました。ダブリンには、随所に無料の観光案内所が設けられ、海外の観光客が手軽に利用しやすいワンデーツアーを扱う窓口も多数あり、地元の観光振興の参考になる事例がたくさんありました。

また、毎日英語を使う環境にいたため、最後にはとっさの時にも英語が自然と口から出るようになりました。実際、外部英語検定試験のスコアは、留学前の615点から、帰国後は720点にまで上がり、英語力の向上を実感しています。

留学を終えて

新たな挑戦を続け、世界を広げていきたい

帰国後は、海外留学を視野に入れ、留学先で取得した単位が認定される長期留学制度が充実している長崎大学多文化社会学部に進学しました。大半の授業が英語で行われることや、留学生と一緒に寮生活を送れることも魅力でした。専門課程の授業が増える2年生からは、プロモーションやマーケティングの授業を履修できるコースへ進む予定です。

また、留学中に交流したヨーロッパの学生から様々な刺激を受けましたが、その1つが、「英語はできて当たり前で、英語だけではダメ」と、多言語を習得していたことです。私は欧米人の習得者が少ないアジアの言語も身につけ、自分の強みにしたいと思うようになりました。

高校時代の留学を通して、自分にとって心地よい環境、いわゆるコンフォートゾーンから抜け出すことの大切さを学んだと感じています。抜け出すことには不安も大きいですが、未知の環境に飛び出すことで、得られることは多いと感じました。

今後も多くの人とのつながりを築きながら、様々なことにチャレンジして、自分の引き出しをどんどん増やしていきたいと思っています。その一環として、現在は長崎県内の企業と学生が協業する学外のサークル活動に携わっています。そこでは、県南部に位置する伊王島（いおうじま）への外国人観光客を増やすため、同島のホテルと企画を練ったりしています。

大学卒業後も多様な経験を積んだ上で、将来的に何らかの形で地元の観光プロモーション活動に携わっていきたいと考えています。

所属する学外サークル「長崎ブレイクスルー」では、主に中国人富裕層に向けたプロモーション企画を立案している。

留学経験を通して、人生の選択肢を広げた

高澤さんの保護者
高澤朋美さん

娘から留学の話を聞いた時は、「受験生なのに大丈夫なの?」と不安に思いました。しかし、本人から「机に向かうことだけが勉強じゃないよ」と言われ、留学経験は娘の人生において必要なスキルだと私なりに考えて、応援することにしたのです。

インターンシップ先の環境は想像と違って苦労もあったと聞いていますが、それを乗り越え、充実した日々を送ることができたようです。帰国後は英語力がアップし、やりたいことも明確になって、受験勉強にもより一層力が入るようになりました。

娘の姿を見ていると、高校生のうちに留学を通して強めの刺激を受けておくことで、人生の選択肢の幅が広がり、その後の高校生活や人生において、より充実した日々を送ることができるようになると思います。

学先では必ずしもそうはいきません。だからこそ、何事も自分から動くことの大切さに気づいたのでしょう。

このように、留学は視野やものの見方を広げたり、積極性やチャレンジ精神を育んだりする絶好の機会です。その上で、これからの進路を考え、広い視野をもって今後学問を学んでいけることが、高校生で留学することの大きな価値だと思います。

2年生でイタリアに留学　スポーツ・芸術分野

ファッションデザインの奥深さを学び、自分の目標とやるべきことが明確になった

兵庫県・神戸市立
葺合（ふきあい）高校3年
吉井佳弥（かや）さん

吉井さんの留学

目的◎憧れのブランドがあるイタリアで、ファッションについての本質的な理解を深められるよう、服飾文化の研究者の下で学びたいと考えた。

印象に残ったこと◎自分の日本文化への理解不足を自覚した。また、ブランド商品の歴史を学び、時代の一歩先を行くデザイナーの感性の鋭さを実感した。

留学による変化◎デザインラフを描いたり、専門学校の体験授業に参加したりと、ファッションデザイナーを目指して行動し始めた。将来は、イタリアへの長期留学を検討中。また、日本文化への関心が高まり、美術館などをよく訪れるようになった。

留学の目的

憧れのブランドの本場で、ファッションを学びたい

私は、以前からファッションデザイナーになることを夢見ていました。上品でありながら色使いが大胆なイタリアのブランドに憧れていたため、その本場でファッションデザインを学びたいと、「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」に応募しました。

イタリアでは、デザインだけでなく、その変遷や社会的影響といった、服飾文化全体の研究が盛んに行われています。ファッションについての本質的な理解を深めたかった私は、そうした研究者が在籍し、なおかつイタリア語も学べる学校を探して、ファッションコースが併設されている、ミラノの学校に3週間留学することにしました。

留学の様子

ファッションの歴史を学び、その奥深さを実感

午前中はイタリア語の授業で、東ヨーロッパやアジア諸国から集まった留学生とともに、先生との会話を通して学んでいきます。先生が生徒の母国や出身地の文化などについて

教師・保護者が語る 吉井さんの成長

主体的な行動力と適確な判断力を身につけた

兵庫県・神戸市立葺合高校
村上ひろ子先生

留学後の吉井さんは、「世界的に活躍するファッションデザイナーになる」という目標を明確にし、その達成に向けて主体的に行動するようになりました。日々の学習だけでなく、将来の長期留学を見据え、今回の留学でお世話になった研究者に、現地の大学や専門学校について、SNSで相談することもあるようです。

探究学習に取り組む姿勢からも、成長がうかがえます。例えば、レポートを作成する際、1つの情報に基づいて結論を出すのではなく、複数の情報を集めて検討した上で、自分なりの判断ができるようになりました。他国に1人で行けば、自ら判断して決めなければならない状況が、日本にいる時よりもはるかに多くなります。そうした経験が、普段の生活にも生きているのでしょう。また、何事にも妥協せず、納得がいくまでやり抜けるようになりました。自分で計画した留学をやり遂げたことで、自信を深めるとともに、多くの学びを得られたからだと思います。

質問した際、ほかの留学生は自国の伝統的な事物を次々に挙げ、その歴史や魅力を具体的に説明していました。ところが、私は日本の名所などの名前は知っていても、それについて詳しく語ることはできず、身近な文化への関心がいかに薄かったかを痛感し、恥ずかしくなりました。

午後のファッションコースの授業では、研究者によるマンツーマンでの指導の下、色彩や生地の特性などの基礎的な内容から、ファッションの歴史に踏み込んだ発展的な内容まで幅広く学び、ファッションデザインの奥深さを感じました。例えば、以前に流行した数種のブランド商品の画像を見ながら、素材の用い方やデザインの特色、それが多くの消費者に受け入れられた社会背景などを解説されると、時代の動きを的確に捉え、その一歩先を見通して流行をつくり出した、デザイナーの感性の鋭さと豊かさが伝わってきました。

複数の言語を習得している留学生が多いことに刺激を受け、帰国後もイタリア語を独学で学んでいる。

研究者と一緒にミラノのブランド店をいくつか訪ねた際には、世界の流行の最先端を行く作品を前に、そのデザインのポイントについて説明を受けました。また、課外活動として1人でローマに出かけ、ファッションの専門学校で、生徒の作品を見学しました。そうした見事な衣服を実際に目にしたり、手に取ったりしたことで、色合いや刺繍の細やかさ、生地の質感を生かしたデザインの工夫などがよりよく分かり、「自分でも手がけてみたい」という思いが一層強くなりました。

留学を終えて

イタリアで専門的に学び、プロのデザイナーを目指す

以前の私は、ファッションデザイナーにただ憧れるばかりで、何も行動できていませんでしたが、留学を通して、今の自分にできることが具体的に見えてきたため、それに積極的に挑戦するようになりました。例えば、ミラノやパリなどで毎年開催される、世界的なファッションコレクションのカタログを購入し、それを参考にしながら、自分でデザインラフを描き始めました。また、ファッションの専門学校の体験授業などに参加し、ラフの添削指導を受けたこともあります。そして、留学中の語学の授業がきっかけで、日本文化への関心が高まり、美術館や日本庭園などにもよく足を運ぶようになりました。そうした中で、「イタリアの大胆な色使いと日本の繊細な美意識の融合」という、自分の手がけたいデザインの具体的なイメージも固まってきています。

留学先の学校で交流した他国の生徒には、留学経験が豊富な人が何人もいました。自分のやりたいことに挑戦する彼らの前向きな姿勢から刺激を受けたこともあり、今後も積極的に機会をつくって海外に飛び出そうという気持ちが強くなりました。高校卒業後は、日本の専門学校に進学してファッションデザインの基礎を身につけた上で、プロのデザイナーを目指してイタリアの大学や専門学校への長期留学を構想中です。いつか、世界に通用する独自のブランドを設立したいと考えています。

海外に出れば、多様な人との交流や、未知の文化との出会いを通して、視野が大きく広がります。また、高校のクラスの中だけにとどまらず、世界の中に身を置くことで、自分を客観的に見られるようになると思います。そうして、自分の新たな可能性に気づくとともに、本当に進みたい道を発見するきっかけを得られるでしょう。大きな進路選択を控えた高校時代に留学することには、非常に大きな意義があると考えています。

多様な体験を通して、進みたい道を決められた

吉井さんの保護者
吉井將人さん　**吉井有紀**さん

留学中は、現地の学校での学びのほかに、休日に見学した美術館や、古都・ミラノの町並みなどからも、感銘を受けたと聞いています。多感な時期なので、それらの美しさは一層印象深かったでしょう。また、現地で知り合ったセレクトショップの経営者や、学校で教えを受けた研究者といった、ファッションにかかわる人々との交流を通して、刺激を受けたようです。そうした多様な経験が、「ファッションデザイナーとして、自分のイメージを形にしたい」という意欲につながったのだと思います。

自分が望んで選んだ道であれば、たとえ困難に直面しても、それを乗り越え、夢の実現に向けて努力を重ねてくれるだろうと期待しています。

2年生でフィリピンに留学　国際ボランティア分野

貧困を目のあたりにし、人々の心の支援を充実させたいという目標が明確化

佐賀県立
致遠館高校3年
志岐友晶（しきともあき）さん

留学の目的

子どもと交流する中で、自分に可能な支援を考えたい

心理学に関心があった私は、日本と近距離にあるアジア諸国の人々と交流し、文化や価値観の違いを肌で感じてみたいと思っていました。また、発展途上国でのボランティア活動を通して、社会的に厳しい環境で暮らす子どもに対して、自分には何ができるのかを考えたいと思っていました。そこで、英語の勉強にもなるだろうという期待から、英語を公用語の1つとするフィリピンでのボランティア活動を計画し、国際ボランティア分野がある「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」に応募しました。

留学の様子

相手の心に寄り添うことの重要性を実感

滞在期間20日間のうち、語学学校で英語を学んだ5日間を除き、キリスト教の教会が運営する孤児院で10日間、火災の被災地で5日間、世界各国から集まった留学生とともにボランティア活動に取り組みました。

その孤児院では、保護者が薬物中毒などになり、家庭での養育が困難

志岐さんの留学

目的◎経済的に厳しい環境で暮らす子どもと交流し、自分にはどのような支援ができるのかを考えたいと、フィリピンでのボランティア活動を志した。

印象に残ったこと◎貧困を目のあたりにし、行政の福祉が行き届かない現実に衝撃を受けた。また、ボランティア活動の真の目的を自問し始めた。

留学による変化◎手助けを受けられないことで、自暴自棄に陥ってしまう前に、心理的な支援の手を差し伸べられるよう、臨床心理士を目指し始めた。大学進学後には、イタリアやフィンランドといった心理療法の先進国への留学を志望している。

教師・保護者が語る 志岐さんの成長

子どもとの交流を通して、実りのある気づきを得た

佐賀県立致遠館高校
野田恵理子先生

志岐さんは、私が担任した1年生の頃から、大学で心理学を専攻したいと話していました。その学びにつながるものとして、留学への意欲を高めたようです。高校時代の留学の意義は、多様な価値観に触れて視野を広げることにあると、私は考えています。そこで、応募書類の作成や活動計画の立案などについて志岐さんに相談された際には、「心理学だけにこだわらず、子どもとの交流を大切にしてほしい」とアドバイスしました。実際、志岐さんは、子どもと向き合う中で、気遣いを学んだり、自分にできる支援への意欲を高めたりと、充実した留学を実現しました。

全教科・科目への学習意欲が向上した

佐賀県立致遠館高校
野田香奈子先生

私は2年生から志岐さんを担任していますが、留学を通して学習への姿勢が大きく変わりました。以前は

になった乳幼児が生活しています。私は、食事や入浴など、子どもの身の回りの世話を手伝いました。子どもには英語が通じないため、彼らの母語・ビサヤ語をボランティア団体の職員に教えてもらい、身振り手振りを交えてコミュニケーションを図りました。すると、なかなか食事をしてくれなかった子どもも、次第に私の差し出すスプーンを口に運び、笑顔を見せてくれるようになったのです。自分が相手の心に寄り添おうとすれば、相手も打ち解けやすくなるということは、文化が違っても共通しているのだと実感しました。

宿泊先から孤児院に通う途中には貧困地区があり、いわゆるストリートチルドレンが何人もいました。行政の福祉がほとんど及ばず、衣食住にも困る人々が暮らす地域が存在するという、日本とはあまりにも異なる現実を目のあたりにし、大きな衝撃を受けました。

孤児院でのボランティア活動の一環として、山の中にある集落に薬品を届けたり、子どもに英語を教えたりした。

孤児院以外で訪問した貧困地区の救援施設は、居住者に食事を提供する場であるとともに、子どもの教室にもなっていました。厳しい状況の中でも生き生きと学ぶ子どもの姿を見て、私は、学校があたり前にある環境がいかに恵まれたものであるかを痛感しました。また、ボランティア団体の代表者の講話も忘れられません。それは、「ボランティア活動の真の目的は、ボランティア活動を行う必要がない、豊かな社会の実現だ。活動自体に満足していてはならない」という内容でした。私は、自分にできる支援とは何かを、より真剣に自問し始めました。

留学を終えて

臨床心理士として、被支援者の自立支援を志す

留学後は、心理学への関心がますます強くなりました。人間は、困難な状況に直面し、誰の助けも得られないと、自暴自棄に陥ってしまいかねないと思います。そうなる前に、心理的にしっかり支え、自立に向けた手助けができるよう、臨床心理士を目指すことにしました。そこで、大学では、以前考えていた教育心理ではなく、人間の心の支援について学びたいと思っています。

また、孤児院や被災地で交流した子どもは、私が留学前に漠然と想像していた発展途上国の子どものイメージとは違って、明るく活発でした。自分自身が先入観にとらわれていたことに気づき、自分とは何か、人間とは何かといった面からも、心理学を追究したいという思いがあります。

大学進学後には、イタリアやフィンランドといった、先進的な心理療法が行われている国に留学し、患者やその家族との向き合い方を学びたいと思っています。日本にも、貧困や働き方の問題から、困難な状況に直面している人がたくさんいます。留学を機に、そうした人の心にもしっかり寄り添えるよう、日本における心理療法の水準の向上に貢献するという目標が固まりました。育児放棄といった悲劇を未然に防ぎ、孤児院などが必要とされない社会を実現したいと考えています。

相手の立場や心情を気遣えるようになった

志岐さんの保護者
志岐幸子さん

息子は、図書館でフィリピンの本を読んだり、知り合いにフィリピン人を紹介してもらって話を聞いたりと、留学の準備を熱心に進めていました。自分で計画し、それを成し遂げたことは、大きな自信につながったようです。また、異なる環境に身を置いたことにより、相手の立場や心情などを気遣いながら、向き合えるようになったと感じています。

正直、フィリピンに留学したいと聞いた当初は、心配が募ったのですが、息子の話を聞くうちに、熱意が伝わってきました。今では、送り出して本当によかったと思っています。今後も、やりたいことに積極的に挑戦していってほしいと思っています。

好きな教科・科目に意識が偏りがちでしたが、帰国後は全教科・科目に力を入れています。困難な環境でも生き生きと学ぶ子どもの姿から刺激を受け、「自分も精いっぱい学ぼう」と感じたのだと思います。また、希望進路の具体化に伴って、自分にできる支援のあり方を根本的に考えるようになり、知識欲や好奇心が高まったことも、学ぶ姿勢に影響しているのでしょう。異文化の中での多くの気づきが、主体的に学ぶ姿勢につながっているのだと考えています。

Benesse

私たちも留学のお手伝いをしています！

短期留学は非日常を体感できるチャンス

ベネッセ
海外留学センター長
中居智人（ともと）

ベネッセ海外留学センターでは、小学生から高校生を対象としては毎年約1,000名の生徒に短期留学プログラムを提供しています。単なる「旅行」とは異なり、英語学習、大学訪問やプレゼンテーションなどを盛り込んだアカデミックなプログラムが特徴です。また、気心の知れた仲間と一緒に参加するといったものではなく、全国から約20名の同世代が集まり、初対面の仲間と海外で２～３週間過ごすことになります。短期留学の目的は、「学校で学んでいる英語が実際に海外で使えるかを試したい」「いずれは長期留学をしたいが、自信がないので、まずは試しに短期留学をしたい」「将来海外進学を考えていて、自分が向いているかを確かめたい」など、参加者によって様々です。

私たちは、留学を終えた参加者の様子を見て、短期留学は「英語力向上」や「グローバル人材の育成」といったことだけではなく、「英語が使えた」「２週間も海外で生活することができた」「自分が経験したことがない環境に踏み出せた」といった「経験」に価値があると気づかされました。その中でも印象的な１人について、ご紹介したいと思います。

ある高校３年生は、学校になかなかなじめずにいたのですが、「何かを変えたい」という思いで、勇気を出してアメリカ・カリフォルニアでのプログラムに参加してくれました。留学中は文化の違いに戸惑ったこともあったようですが、自ら乗り越えることができ、「やればできる」という自信になったようです。帰国後には、お母様からお手紙を頂戴し、保護者として子どもの成長を願う思いと、留学が成功した喜びがつづられていました。この短期留学が人生の選択肢を広げるきっかけになり、海外大進学を志望し、無事、海外の大学に進学しました。現在は夢の実現に向けて頑張っているようです。

私たちが提供しているのは、まさに「非日常にチャレンジする機会」です。新たな一歩が踏み出せるよう、全力でご支援して参ります。「トビタテ！留学JAPAN」のコンセプトや要件に合うプログラムも企画しておりますので、ぜひ、ご期待ください。

留学プログラム
随時更新中！

ベネッセ海外留学センター

［フリーダイヤル］0120-125-968

受付時間　月～金 12:00～20:00／土 10:00～18:00
（日曜、祝日、年末・年始を除く）

https://www.benesse-kaigai.com/service

お客様
サービスセンター

［フリーダイヤル］0120-350455

受付時間　月～金 8:00～19:00／土 8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社　〒700-8686 岡山市北区南方３-7-17

2017年10月16日発行　発行人 山崎昌樹　編集人 春名啓紀　発行所（株）ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2017
印刷製本／（株）協同プレス　編集協力／（有）ペンダコ　執筆協力／二宮良太　撮影協力／荒川 潤　表紙イラスト／岸 潤一
VIEW21編集部 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階